

「フルート」外伝第一話

## ジュリア

「さあ、それじゃそこに粉をふるい入れて混ぜてね。こねてはだめよ。切るような感じで、さっくり混ぜるの。」

湖の畔に広がる保養地ハルマス。そこに建つゴリスの別荘の台所で、奥方のジュリアが少女たちを相手に菓子作りの講習の真っ最中でした。

メールが混ぜる手を止めて尋ねます。

「このくらいでいいかな？」

いつもはおてんばで男顔負けの戦いぶりを見せる渦王の王女も、今日は白いエプロンなどしめてるので、けっこうかわいらしく見えています。ジュリアはほほえみ返しました。

「そうね、このあたりがまだ粉っぽいから、もう少し……はい、いいわ。ポポロ、スグリの実を入れてちょうだい」

「はい」

小柄な少女がすぐに近寄ってきました。黒衣の上にやはり白いエプロンをしめて、手には小さな器を抱えています。器の中では、たくさんの小さな赤い実が宝石のように輝いています。

「そのまま混ぜちゃっていいの？」

とメールが尋ねると、ジュリアがまたゆったりとほほえみしました。

「ええ、やっぱり切るような感じで全体に混ぜてね。これは種なしスグリだから、口当たりが良くておいしいのよ」

豊かな栗色の髪が、ほほえみに合わせて優しく揺れます。美人ですが、それ以上に暖かく落ちついた雰囲気伝わってくる女性です。そ

ばにいるだけで安心できる気がして、メールもポポロも、知らないうち一緒にほほえんでいました。まだ子どもはいないのに、何故かとても母性を感じさせる人でした。

台所の窓の外には雲ひとつない青空が広がっていました。生きるか死ぬかの間の声の戦いは終結し、平和な時間が戻ってきています。少女たちは、激戦を切り抜けてきた少年たちに、ねぎらいの気持ちを込めてご馳走しようと、ゴリスの奥方のジュリアに習ってケーキを作っていたのでした。混ぜ合わせたタネを型に流し込み、燃えているかまどの中に入れます。

「さあ、これで後は一時間くらいかしらね？ 焼き上がるまで、私たちもちょっとお茶にしましょうか」

とジュリアが言って、少女たちに黒茶を淹れてくれます。その間に、少女たちが道具を洗って片付けます。

すると、ふふふ、とジュリアが笑いました。

「本当は呼び鈴を鳴らして小間使いに片付けさせるほうがいいのだけれど、なんだか面倒くさくてね。こうやって自分たちでやってしまっただほうが気楽なのよ。ごめんなさいね」

メールとポポロは目を丸くしました。自分たちが使ったものを自分たちで片付けるのは、少女たちにとっては当たり前のことです。

けれども、実を言えば、ジュリアほどの身分の貴婦人が自らお茶をいれたり、台所に立って料理を作ったりすること自体、本当はとても珍しいことなのでした。ゴリスも相当気さくな人物ですが、実際には国王に直接仕えていて、城にも居室を準備されているほどの大貴族です。その奥方となれば、生活の一切のことは召使いや女中たちに任せっきりにして、ただ城の一室に座って、彼らに命令を下しているのが本来あるべき姿なのでした。

「でも、そういうのは、とてもつまらないでしょう？ ただ座ってい

るただだなんて退屈でしかたないもの」

とジュリアが笑って話します。落ちついた物腰とは裏腹に、案外はつきりした物言いをします。そんな彼女がたまらなく素敵に見えて、少女たちはまた一緒になって笑いました。本当に、貴族の生まれとは思えない、親しみやすい人物です。

そんな雰囲気は、お茶を飲む間も続きました。他愛もない話をするうちに、メールがふと、尋ねます。

「ねえ、ジュリアさん。フルートから聞いたんだけどさ、ジュリアさんとゴリスって、婚約してから結婚するまで十年以上待たされたんだって？　ゴリスが金の石の勇者をシルの町ですつと待ってたから。それってさ、ジュリアさんはつらくなかったの？」

待たされる、ということばに、メールは敏感です。職務や戦闘に出かけていく渦王を、城で待ち続けていた亡き母を思い出すからです。フルートからジュリアとゴリスの話が聞かされてから、いつか、その時のことを詳しく聞いてみようと考え続けていたのです。

あらあら、とジュリアが首をかしげました。とても不躰で失礼なメールの質問にも、怒った様子は見せません。ちよつと考えてから答えま

す。

「そうね……つらくなかったと言えば、嘘になるわね。なにしろ、あの人はシルの町に行つて間もなく、私との婚約を破棄してきたから。その状態で待ち続けるのはね、たしかに、ちよつとつらかったわね」

「婚約を破棄してきた!？」

メールとポポロは同時に驚きました。いつもはおとなしくて引つ込み思案なポポロですが、さすがにこういう話には夢中になってしまいます。

「ど、どうして？　嫌いになったとか、そういうことじゃ……ないですよよね？」

と自分から尋ねていきます。そう、今、二人はこうして結婚しているのですから、そんなことが理由のほはずはありませんでした。

ジュリアはまた静かにほほえみました。遠い昔を眺める目です。

「違うと思うわ。自分にはシルの町での任務があるから、あなたと結婚している暇はない。この婚約はなかったことにして別の男性のところへ嫁ぐように、と一方的に手紙を書いてよこされてね、後は、こちらからいくら使いをやつても、けんもほろろの扱いだったの。あの人は、ああ見えてとても真面目だから　私を待たせ続けることに我慢できなかったのでしょうね」

わああ、とメールが声を上げました。あまり女の子らしくない調子です。ポポロがまた尋ねました。

「でも、それでもジュリアさんは待ってたんですよね。どうして……？」

小さい頃から家同士で決められてた許嫁かんなかだったの……？」

「いいえ、私は地方の小貴族の娘ですからね。家柄も資産も、あの人は比べものにもならないわ。そんな家同士で婚約なんてするはずなくだよ」

「ただどさ、その資産目当てで待ってたわけでもないよね？　そんなの、想像がつかないもん!」

とメールが言います。悪気は全くないのですが、本当に、この海の王女は齒に衣着せない言い方をします。ジュリアはそれでも怒ることなく、静かにうなずきました。

「そうね、そんなことで待ち続けたわけじゃないわ……」

ほほえむ瞳を窓の外に向けます。中庭のどこかでは、夫のゴリスがフルートや占い師のユギルたちと話をしているはずですよ。

「じゃ、どうして!？」

少女たちはいつせいに身を乗り出して尋ねました。メールもポポロも、納得のいく話を聞かせてもらうまでは、とても退けない気持ちでいます。その真剣な表情に、ジュリアはまた、あらあら、と声を出し

ました。

「とんでもない話を始めてしまったかしらね？ …… そんなに聞きたくて？」

メールとポポロが大きくうなずきます。

「それじゃあ ケーキが焼き上がるまでの間、少しだけね。でも、この話は他の人たちには言ってはだめよ。特に、主人には内緒。人に話したとわかったら、後で怒られてしまうから」

そう言つて、ふふふつと笑うジュリアは、まるでメールたちと同じ年頃の少女のようでした。

メールとポポロは大きくうなずき、そして、三人の女性たちは、台所の片隅で、内緒の思い出話を始めたのでした。

「私はさつきも言つたとおり、地方の小貴族の娘だったの。それでも、女性は十八の年になると社交界にデビューするのがしきたりだから、故郷から王都のディーラまで出ていったわ。実際にはもう十九になつていただけだね……」

デビューにかかるお金を準備するのに時間がかつたのよ、と言つて、ジュリアが笑います。貴族と言つても、地方に住む身分の低い小貴族たちは領地も狭く、そこから上がってくる税金も少ないので、下手をすれば、都市部の庶民よりつましい生活をしなければならぬのでした。

「古い馬車に御者と乳母の二人だけをお伴に、ディーラを自ざしたわ。ディーラには親戚に当たる人がいたから、そこにしばらく身を寄せることになつていたの。私も年頃の娘でしたからね、華やかな社交界を

想像して、それは胸躍らせていたものよ」

メールは海の王の娘ですが、貴族や社交界と言つたものは、海の民には存在しません。ポポロは天空の国の貴族ですが、こちらもまた、人間で言うところの貴族とはまるで違つた存在なので、やっぱり社交界などというものはまったく知りません。珍しい話を聞く気持ちで、二人の少女は一生懸命ジュリアの話に耳を傾けていました。

「でもね、慣れない道だったものだから、馬車が街道脇の崖から転落してしまつたのよ。小さな崖で、それも今はもう、陛下が直々に補修をお命じになつて、何の危険もない場所になつてきているけれど、でも、運悪く、私たちはそこから落ちて、馬車は壊れてしまふし、御者も乳母も怪我をして動けなくなつてしまつたのよ。馬も負傷して、奇跡的に怪我をしなかつたのは私だけ。もう夜の闇が迫ってくる時間帯で

だから、私たちの馬車も先を急ぎすぎて、曲がり角の崖に気がつかなくなつただけだね。なんとか私は崖の上まで上がったけれど、街道を通りかかる人もなくなつたものだから、助けを求めて走つたわ。ディーラにはだいたい近い場所、灯りが見えていたから、町の方向はわかつたの。とにかく走つて走つて……どのくらい走つたかしら？ よく覚えてもないのだけれど、とにかく走つて、町の入口まで来たところで、真つ先に出会つた人に飛びついて助けを求めたの。『お願いです、馬車が壊れて供のものが怪我をしています。助けてください！』つて……。夢中だつたから、それがどんな人かも確かめる余裕はなかつたんだけど、それがね、あの人。アルバート・ゴラントスだつたのよ」

少女たちはまた、きゃあ、とも、ひゃあ、ともつかない声を上げました。

「で、そこでゴリスがかつこよく助けてくれて、それで二人は知り合つたわけ？ うつわあ！ 物語みたい！」

メールが歓声を上げます。けれども、ジュリアは笑いました。

「いいえ、かつこよく助けてなんてくれなかつたわ。あの人はね、私をちらりと見ただけで、町の方を顎で示して言ったのよ。向こうに衛兵の屯所がある。用事があるなら、そっちへ行け」ってね。よく見たら、黒づくめの服にひげ面の怖そうな人で、腰には大きな剣を下げていたし。これはてつきり強盗の親分にでも声をかけてしまったに違いないと思つたわ」

あれまあ、と少女たちがあきれます。が、今でもゴーリスは決して愛想の良い人物ではありません。余計な物言いはしませんし、目つきにも態度にも厳しいところがあります。若い頃のゴーリスの姿もなんとなく想像がつくような気がしました。

ジュリアが話し続けます。

「もう、私はドキドキよ。強盗の親分につかまってしまわないように、後ずさりながら、お礼を言いながら、町の屯所まで走っていいこうとして。でも、私、その時裸足になってたのね。高いかかとのある靴ではとても走れなくて、途中で脱ぎ捨ててきちゃったから。それにあの人が気がついて、『靴はどうした』って聞いてきたの。聞かれたら、答えるしかないわ。『走るのに邪魔だから脱ぎ捨てました』って正直に答えたら、今度は『走ってきた？』って。それから、『どこから？』と聞かれたから、崖の場所を教えたら、あの人はとても驚いてね……後でわかったのだけれど、私、夜道を裸足で六キロ以上も走っていたらしいのね。本当に夢中で、そんなに走ったなんて思つてもいなかっただのだけれど。あの人が私に関わるうとしなかつたのも当然。走っているうちに、私の髪の毛はざんばら、何度も踏んづけてしまったから、ドレスの裾もぼろぼろ。汗で化粧も落ちていりし、とんでもない格好になっていたのね。あの人はあの人で、私を、頭が変になつて家から抜け出してきた、かわいそうな娘だと思つていたらしいのよ」

お互いさまよね、と言つて、くすくすとジュリアが笑いました。少

女たちは何も言えません。ただただ呆気にとられて、話を聞き続けます。

「その後は、あの人もすぐに助けてくれたわ。屯所に連れて行つてくれて、衛兵と一緒に馬車が落ちた場所まで駆けつけてくれて、乳母や御者を助けてくれて……。やっと、ディーラの親戚とも連絡がついて、迎えに来てもらえる段取りになつて、やれやれ、とあの人にお礼を言おうとしたら、いないのよ。もう、どこにもいない。名前も乗つていかなかつたわ。衛兵たちに聞いても、どこの誰とも全然わからなかつたし……。これも後でわかつた話なのだけれど、あの人は時々自分の屋敷を抜け出して、ディーラの下町まで剣の稽古に出かけていたらしいのね。お忍びだったから、自分の身分や名前を明かすわけにはいなくて、いつの間にか姿を消していたの。もつとも、あの人自身、そういう場面で大げさにお礼を言われたりするの好きじゃないから、逃げてしまつただけだね」

そう言つてほほえむジュリアの顔には、慈しむような表情がありました。偏屈で無愛想な自分の夫を、心から理解して受け入れているように、少女たちには見えました。

「でもさ、それじゃどうやって二人は知り合つたわけ？ どうかで再会したんだろ？」

とメールが尋ねました。

ジュリアはまた、あら、と言つて頬に手を当てました。

「困つたわね。このくらいでいいことにしない？ これ以上話したら、本当に、私はあの人に叱られてしまうのだけれど」

「そんなあ！ ダメだよ！」

「あたしたち、絶対に誰にもしゃべらないから！」

少女たちがあまり熱心に頼むので、とうとうジュリアも根負けしました。絶対に、絶対に内緒よ、と言つて、さらに思い出話を続けまし

た。

その日、ジュリアは生まれて初めて出席した舞踏会で、ただただ圧倒されていました。とある老貴族の誕生祝いのパーティで、規模も内容もディーラの貴族たちからすれば、ごく普通のものでしたが、地方から出てきた小貴族の娘の目には、信じられないほど豪華な集まりに映りました。この世のものとも思えないほど美しく着飾った男女が、目の前で演奏する楽団の曲に合わせて、軽やかにステップを踏みます。それはまるで、おとぎ話に出てくるエルフたちの舞いのようです。

ジュリアを連れてきた親戚は、パーティの主役や主だった人たちに、彼女を紹介してくれました。けれども、同じように社交界デビューする娘や息子を紹介しようとする貴族たちは数え切れないほどいて、身分も資産もない地方の小貴族の娘と挨拶以上の話をしようとする者など誰もいませんでした。

それでも、ジュリアは目の前のきらびやかな集まりを、飽きることなく眺めていました。これが社交界というものなんだわ、とただただ感心してしまいます。誰も自分を相手にしてくれないことなど、これっぽっちも気になりませんでした。むしろ、ゆっくりとパーティや人々の観察ができるので、放っておかれて好都合なほどでした。

すると、目の前を通り過ぎていく年配の婦人たちの話し声が聞こえてきました。

「まあ、なんであんな方がおいでになったんでしょう。場をわきまえてらっしゃらないこと」

「珍しいですわね。あの方がこんな集まりに出てらっしゃるなんて」

「いやですわ。せつかくのお祝い事が台無しになるじゃありませんの」  
口調こそ丁寧ですが、とんでもなく鋭い揶揄と非難の響きが込められています。それが、本当に美しく着飾った上品な婦人たちの口から出てきたので、ジュリアはびっくりしてしまいました。中央の貴族たちの陰険さを、この時、彼女は初めて目の当たりにしたのです。

この人たちにこんな悪口を言われているのは誰かしら、と思わず会場を見回して、ジュリアはまたびっくりしました。主役の老貴族に挨拶を終えたひとりの貴族が、こちらへ向かって歩いてくるのに気がついたからです。周りに人々が、先の貴婦人たちと同じ揶揄と非難のまなざしを向けています。好奇心に満ちた目で眺めている人々もいます。普段、パーティに滅多に顔を出さないその人物が、何故ここに現れたのだらう、と動向を見守っているのです。

その人は、たくましい体を仕立ての良い黒ずくめの服で包んでいました。大股に、まっすぐ壁際のジュリアへ歩み寄ってきます。ジュリアは驚きのあまり声が出ませんでした。間違いありません。腰に剣はないし、身なりも、あの時よりずっと上等になっていますが、それは夜道でジュリアと供のものを助けてくれた無愛想な青年だったのです。

青年はジュリアに手を差し出しました。  
「俺と一曲踊ってもらえるだらうか？」

「ホントにホントっ!? あのゴリスがホントにそんなこと言ったのっ!？」

「ジュリアさんのことが忘れられなくて、わざわざ会いに来たのね。うわあ……なんか、すごいわ!」

メールとポポロは、ジュリアの思い出話に大騒ぎです。すると、ジュリアがちよっと恥ずかしそうに笑いました。

「そんなにロマンチックな話でもなかったのよ、その時は。私は、あの人が貴族だったってことにびっくり仰天してしまって 絶対に、町の剣士かなにかだとばかり思っていたから 言われて一緒に踊ったけれど、ろくに話もできなかったの。助けてもらったお礼を言うのがやっと。そしたら、あの人はなんて言ったと思う?」

少女たちは目を丸くしました。

「……どういたしまして、とか、大したことではない、とか?」

「いいえ。『あなたは走るのが得意なのか?』と聞いてきたのよ。大真面目な顔で」

少女たちは大爆笑です。今はいぶし銀のようなゴリスが、女性への話しかけ方ひとつ知らない無骨な青年になって、目の前に現れてきたような気がします。

「それで? それで? ジュリアさんはなんて答えたのさ?」

メールが腹を抱えて笑い転げながら尋ねます。

「なんて答えていいのかわからなかったから、とにかく正直に答えたわ。『私の故郷は山の多い場所だから、小さい頃から歩いたり走ったりするのは慣れてます』ってね。そうしたら、『そうか』と納得して、後はそれっきり、なにもおっしやらなかったの」

少女たちはまた大爆笑です。

けれども、そんなジュリアをどつやらゴリスは気に入ったようで、その後、ことあるごとにジュリアの元に花や贈り物が届くようになり

ました。

変人で偏屈でも、ゴリスは古くからロムド国王に仕える名門貴族のひとりです。父親は三年前にこの世を去っていて、ゴラントス家の跡継ぎが誰をめとるのかと注目されていました。本当ならば、噂も華やかなはずの立場の人物です。ところが、当人は必要最低限の集まりにしか顔を出さず、女性どころか人とも滅多に顔を合わせず、噂によれば、しょっちゅう屋敷を抜け出しては都の下町に出入りしている。それも、ろくでもない場所に入り浸っているということで、都の貴族たちは、ゴラントスという名前を聞いただけで、顔をしかめて鼻の頭にしわを寄せるようになっていました。本来なら山のように押し寄せてくるはずの縁談も、ゴラントス家の跡継ぎには、数えるほどしか舞い込みませんし、それも、片っ端から当人が断ってしまっていました。

そんなゴラントス卿に、ついに意中の女性が現れた。それも、都の貴族たちが誰も名前も聞いたことがなかったような、地方の小貴族の娘だという。ディーラの社交界はその話題で持ちきりになり、物見高い貴族たちが、毎日のようにジュリアを「見物に」やってきました。まったく、都の貴族たちのいい暇つぶしの種にされたのです。

さすがのジュリアもこれには閉口しました。連日、貴族たちが入れ替わり立ち替わり訪ねて来るので、身を寄せさせてもらっている親戚にも多大な迷惑がかかります。ジュリアとしては、ゴリスを嫌いというわけでもなかったのですが、どのみち都の大貴族と地方の小貴族とでは身分が違います。ジュリアがゴリスを色仕掛けで落として玉の輿を狙っているのだという、とんでもない噂も耳に入ってきてしまいます。とうとうジュリアはゴリスには何も言わずに、ロムドのはずれにある故郷へと戻っていきました。王都ディーラから北東へ、馬でも十日以上かかる辺境です。山間にひっそりと横たわる小さな領地で、ジュリアはまた元の静かで平凡な生活に戻るはずでした。

ところが、そこにもやがて都からゴリスの贈り物が届くようになってたのです。まれに手紙が添えられてくることもありました。たいていは短い時間の挨拶でしたが、ジュリアは丁寧な返事を書き続けました。贈り物などいただくいわれはないと思っていました。それでも感謝の気持ちは示さなければならぬと考えたのです。

すると、ある時、近いうちにあなたの故郷を訪ねたい、と書かれた手紙が届きました。まさか大貴族のゴラントス卿がこんな田舎に来るはずはない、ただの社交辞令に決まっている、と思いながらも、なんとなくジュリアの胸がときめいたのは事実でした。

本当にゴリスがジュリアの屋敷を訪ねてきたのは、それから半年後、二人が初めて出会ってから一年あまり後のことでした。

久しぶりに再会したゴリスは、相変わらず黒ずくめで厳しい目をしていて、大貴族というより剣士と呼ぶ方が断然ふさわしいように見えました。やっぱり口数少なく、ジュリアに会っても、喜んで何かを話すというわけでもありません。ただ、山のような贈り物を屋敷の居間に積み上げて、ジュリアの父親に向かって短く言ったのです。

「あなたの令嬢のジュリア殿を私の妻にいただきたいのだ」

仰天したのはジュリアの両親とジュリアでした。とても身分が釣り合わない、持参金も準備できないから、お断りさせてほしい、とゴリスに懇願しました。

「持参金？ なにそれ？」

とメールが不思議そうに尋ねました。ポポロにも意味のわからない

ことばです。

ジュリアが穏やかに笑って答えました。

「人間が結婚するときのしきたりよ。奥さんの実家で、結婚していく娘にたくさんのお金や品物を準備してやらないといけないの。フルートのような庶民なら持参金も形ばかりだけれど、貴族はね、そういうわけにはいかないのよ。しかも、ゴラントス家は大貴族。そこに嫁にやるとなったら、屋敷や領地全部を売り払ったって、とても持参金なんて準備できなかったのよ」

それを聞くと、ふうつとメールは溜息をつきました。さつきから、彼女は貴族同士の結婚の話に溜息をつき通しです。

「人間ってホントめんどくさいよねえ」

と海の王女はひとりごとのようにつぶやきました。

それでも、ゴリスはあきらめませんでした。ジュリアの両親やジュリアが何度断っても、それでも手紙を送り、金品を送り、自分自身で訪ねていきます。そんなことが一年以上も続いたある日、屋敷を訪れたゴリスに、とうとうジュリアは自分自身で尋ねました。

「何故そんなに私に固執なさいますの、ゴラントス様？ 私はしがない小貴族の娘です。私よりもっと身分も資産も教養もある、あなた様につり合う方は、世間に大勢いらっしやいますわ。それなのに、何故こんなにも私にばかり？ 私のどこが、そんなによろしいとおっしゃるのですか？」

穏やかで物静かに見えても、芯には強いものを持つジュリアです。その物言いも、遠慮している口調ではなく、本当に不思議に思っ

相を確かめようとしている人のものでした。

すると、ゴーリスが微笑しました。めったに表情を変えない黒衣の剣士ですが、ジュリアと二人だけにいるときには、ふっとその表情がなごむ瞬間があります。

「本当ならば、あなたはこの世で一番素晴らしい女性で、あなた以外の女性などとても考えられないからだ、とても言わなくてはならないんだろ？」

とゴーリスが答えました。相変わらず、口調はぶっきらぼうです。

「あいにくと、俺はそんな歯が浮くようなセリフはとも言える人間じゃない。お世辞も社交辞令も、死ぬほど苦手だ。いつだって、俺に語れるのは、俺にとつての真実だけだ。一度だけしか言わん。聞きたければ聞くがいい」

ジュリアはうなずき、ゴーリスは語り始めました。

「俺は今こうしてゴーラントス家の家長を務めているが、もともとは、先代のゴーラントス卿だった父の、妾（めかけ）の子だ。俺の母親は俺が四つの年に死んだが、俺が覚えてるのは、いつも父の気を惹こうと美しく着飾って、父の正妻と張り合っていた姿だけだ。まるで飾り羽根を広げて威嚇し合うクジャクのようなものだ。母親らしいことをしてもらった覚えもない。母が病気で死んだときに自分が泣いたかどうか覚えていない。泣かなかったのかもしれないな……。母が死んだとき、俺の父にはすでに正妻が産んだ三人の息子がいて、跡継ぎは充分間に合っていたから、俺はすぐに養子に出された。あなたのような地方の小貴族だったが、彼の目的は俺ではなく、俺を養子にして大貴族のゴーラントス家とつながりを深めて、その恩恵に預かることだった。おかげで、俺は四六時中ほったらかしにされていた。好都合だったがな。何をしてもとがめられることがなかったし、好きな剣術にも思う存分没頭することができたから。今でも俺は、

着飾ったヤツらが嘘ばかり並べ立てる貴族の世界より、下町の庶民の生活の方が好きだ。子どもの頃からずいぶん遊び回って、なじみのある世界だからな」

ジュリアの屋敷の小さな中庭の、東屋のように枝を広げる木の下で、ゴーリスとジュリアは並んで立っていました。ゴーリスの目はジュリアを見てはいません。ここにはない、遠い昔の景色を眺めています。「ところが、俺が二十二の年に、ゴーラントス家の跡継ぎが次々に流行病で死んでしまった。三人が三人ともだ。正妻も同じ病気で死んだ。娘が他に二人いたが、これはすでに嫁に行っていて、家には子どもがひとりも残っていなかった。俺の父親はすでに七十に近い老齢になっていた。そこで、思い出したように呼び戻されたのが俺だ。いきなり、おまえはゴーラントス家の跡継ぎだ、次の家長だ、と言われて、徹底的に大貴族の勉強をさせられたが、なに、そんなもの。しよせん付け焼き刃だから、身につくものか。剣に自信はあったから、それで陛下のお役に立ちたいとは思っていたが、別に出世したいとも思わなかった。父は俺に陛下の親衛隊長が近衛隊長でも狙わせたかったようだが、まっぴらごめんだと思っていた。宮廷は嘘と虚構の世界だ。陛下は立派な方だが、それに付属する貴族どもには、るくでもないヤツらが掃いて捨てるほどいる。そんなヤツらの中になど入るものか、そんな世界で育った女などめとるものかと、ずっと思ってきた。そのうちに父が死んで、本当に俺はゴーラントス家を継いだ。家を盛り立てるとか、存続させるとか、そんなことはこれっぽっちも考えてはいなかった。今も全然考えていない」

ゴーリスは、普段からは想像もつかないほど饒舌（じょうぜつ）になっていました。吐き出すように話す口調が、感情の強さを伝えます。この大貴族の青年は、貴族でありながら、自分の地位や身分を深く憎んでいるようでした。

けれども、ゴーリスがジュリアに目を向けたとたん、その強く険し

い調子が、ふつとなごみました。おびえたように目を見張る彼女に向かって、静かにほほえんで見せます。

「あなたは違うな。そういう貴族どもとは違う人種だ……。あなたがそうだとさえば、それはまさしくその通りだし、あなたが違うと言うことは、確かに違うのだ。出会ってから、どのくらいだった？ 二年は過ぎたか？ その間、あなたが俺に嘘をついたことは、一度だってなかった。都の貴族たちの中では考えられないことだ。だが、あなたはいつだって、飾ることも偽ることもせずに、ただ本当のことだけを言う。あなたは俺に何度も、結婚することはできない、と言った。だが、俺を嫌いだ、とは一度だって言ったことがないんだ」

ジュリアは思わず真つ赤になりました。思いがけず、隠していた心の中をあらわにされてしまったような気がしました。裸でゴリスの前に立っているような、どうしようもなく恥ずかしい思いでいっぴいになります。

そんなジュリアを黒衣の戦士は引き寄せ、その白く細い手を、自分の無骨な両手で包みました。

「あなただから、結婚したいのだ。身分や家柄のある女など俺には必要はない。むしろ、持参金などもららん。ただ、あなたにそばにいてもらいたい。嘘を言わずに。ただ、俺のそばにいてほしいのだ」

ジュリアはゴリスを見上げました。せつないくらいに真剣な色がそこにあります。嘘をつけないのは、この人物も同じなのです。嘘がつけないからこそ、真実を求め続けるのです。

ジュリアは、栗色の髪の色をかしげて、やさしく相手を見つめました。

「それならば、そのくらいのことならば、私でもきつとできますわね、ゴラントス様」

そう答えてほほえんだとたん、大粒の涙がジュリアの目からこぼれ落ちました。

「けれども、それから間もなく、あの人に陛下からの勅令が下った」とジュリアは話し続けていました。メールとポポロは、もう茶々を入れたり、はやし立てたりすることもできなくて、ただただ彼女の話を聞いています。ジュリアの口調は淡々としていました。

「新しくお城に来た若い占い師が陛下に進言したのだと聞かされたわ。今でこそユギル様は押しも押されもしない城の一番占者だけれど、あの当時は、年も若かったし、誰もその占いを信じようとはしなかったわ。ただ、国王陛下だけが信じて、あの人に、シルの町まで出向いて、魔の森から現れるという金の石の勇者を迎えるように、とご命令になったの。私たちは、結婚式を二ヶ月後に控えていたのだけれど、勅令ではどうしようもなかったわ。あの人は単身でシルの町へ向かって、私は自分の屋敷であの人を待つことになったの……。でも、三ヶ月たつても、半年たつても、金の石の勇者はいっこうに現れない。それならばいっそ私の方からシルの町のあの一とところへ押しかけようかとさえ考えたけれど、小さい頃から庶民の中に入りしていたあの人と違って、私はどうしても貴族のふるまいが抜けないわ。シルの町に潜入しているあの人を正体を明らかにするようにはできなくて、ただ、便りを交わし合うことしかできなかったの。でも、それも、一年を過ぎる頃に、突然向こうから婚約破棄を言い渡してきてね。最初に話した通りよ。自分にはシルの町で待つ任務があつて、結婚している暇がないから、この婚約はなかったことにして、別の男性の元へ嫁ぐように、つて。ねえ、冗談じゃないことよねえ」

そう言うって、ジュリアは少女たちに笑って見せました。何故だか見ている方が胸が痛くなってくるような笑顔でした。

「あの人は、本当に嘘をつくのが下手なの。こちらからいくら手紙を送っても、話をしたいと言っても、使いの者を追い返してしまえばいい。でも、その使いの者が、どんどん荒れていくあの人の様子を伝えてくれたわ。酒に溺れて、見る影もなくなつたような、あの人の姿をね……。シルの町では、いつの間にか『酔いどれゴリス』と呼ばれるようになっていたらしいわね。それでも、あの人は待ち続けたの。いつ現れるかわからない、金の石の勇者をずっと」

そして、実に十年の後、ついに現れたのがフルートです。それまで、ただのシルの町の子どもだとばかり思っていたフルートが、待ち続けていた金の石の勇者だとわかつたときの、ゴリスの驚きがどれほどのものだったか、ジュリアにはわかるような気がしました。そして、過ぎてしまった十年という歳月の長さや重みを、改めてかみしめてしまったのに違いない、ということも……。

「金の石の勇者が見つかつて、あの人はすぐには都に戻ってこなかつたわ。フルートを勇者として鍛える役目があつたから。その後、ロムドの国は闇の黒い霧におおわれてしまったの。フルートが金の石の勇者として旅立つて、ゼンやポチと活躍した話は知っているわよね？あの人は、ロムド城でそれをずっと見守っていたわ。その後は、今度は陛下の側近とも言えるような地位に抜擢されて……十年間、陛下の命令に従って待ち続けたことと、金の石の勇者を育てた功労を認められたのね。あの人はとても忙しくなつて……そして、とうとう、一度も私を訪ねてくださらなかつたの」

メールとポポロは目を見張りました。十年間、待ちに待つたのはジュリアも同じです。その彼女をゴリスが訪ねようとしなかつた、というのは、少女たちには理解できないことだったので。どうして？と尋ねると、ジュリアはほほえみしました。過ぎた思い出にも、淋しそ

うな表情をしています。

「責任を、感じていたのでしようね。王都デューラに戻って、私がまだ結婚もしないであの人を待ち続けていたと知つた時、あの人はとても驚いたのだと人から伝え聞いたわ。でも、あの人から来たのはお手紙だけ。それも、今すぐ誰かと結婚するように。今まで正式に婚約を解消しなかつたのは自分の不手際だったから、慰謝料として私の望むだけのものを支払う、ってね。……それだけの内容よ」

少女たちはまた、何も言えなくなつてしまいました。大人の世界のやりとりというのでしょうか。本当は好き合っているはずの二人が、やっとまた一緒に暮らせる場所に戻ってきたというのに、それでも相手を拒否しようとする心理が、彼女たちにはまだよくわかりませんでした。ただ、ことばにならない怒りと悲しみがこみ上げてきてしまいます。

やつとのことで、メールが言いました。

「そんな そんな馬鹿な話って、ないじゃないか！」

ポポロも必死で言いました。

「でも、それでも、ジュリアさんはあきらめなかつたのでしよう!? だって……だって……！」

ジュリアは、本気で怒り悲しんでくれる少女たちを優しい目で見つめました。いい子たちね、と心の中で言うのと、笑顔になつて答えました。

「もちろんよ。だって、私たちは現に、こうして結婚しているんですからね」

手紙を受け取つてすぐ、ジュリアは馬車でディーラのゴリスの屋敷へ向かいました。屋敷の門や入口に立つ門番や取り次ぎをすべて押し切り、制止しようとする人々の間をすり抜けて、奥の書齋まで駆け込みます。

十年あまり待ち続けたその人が、書齋の真ん中に立っていました。たくましい体つきは相変わらずですが、黒かった髪にはめっきり白いものが混じり、頬がこけて、いつそう厳しい顔つきになっています。ジュリアは思わず泣き出しそうになりました。十年分、年をとつたのは自分も同じです。けれども、目の前にいたゴリスは、十年のその倍近くも年をとってしまったように見えたのです。長い間の苦勞が、そのまましわに変わつて顔に刻まれたようです。

すると、ゴリスが少しだけ笑いました。黒い瞳が淋しげなほほえみを浮かべます。

「あなたは、相変わらず走るのがお得意のようだ」

近くにいるのに遠く離れた場所にいるような、間に見えない壁があるような、越えることのできない距離感がふたりの間に横たわっていました。

「慰謝料で解決なさるとおっしゃるのですか？」

とジュリアはゴリスに尋ねました。考えを変えさせるために相手を手を責める口調にしたいのに、どうしても、哀願するような声になつてしまいます。ゴリスは表情も返事も冷静でした。

「俺にはこれしかできることがない。あなたに十年も無駄な時間を過ごさせてしまったことは、本当に申し訳なく思っている。金や物で償えるものではないことはわかっているが、他に方法がないのだ」

「なんでも、私の望むだけのものを支払うと？」

ジュリアはすでに泣き声になっていました。泣くまいと、冷静に話し合おうと、道々心に誓つてきたのに、やはり耐えることができませ

ませんでした。すぐ目の前に立つ愛しい人に、どうしても手が届かないのです。

「俺は嘘は言わない。さすがに、この命だけは差し出せないが、それ以外のものでも俺に支払えるものであれば、なんでもあなたに差し上げよう」

ジュリアは笑いました。笑いながら涙がこぼれてきます。

「もしも、私があるにゴラントス家の地位と財産をすべてよこせと申し上げたら、それでもかまわないとおっしゃるの？」

ゴリスの顔に薄い笑みが浮かびました。先のほほえみとは違った、冷やかな笑顔でした。

「それであなたの気がすむのなら。もとより、俺はゴラントス家など望んではこなかった。それがほしいと言うのなら、すべてをあなたに譲り渡そう。陛下は家臣の身分を気にされない方だ。俺は一介の剣士として陛下にお仕えする。俺はそれで充分なのだ」

ジュリアの目から涙がこぼれ続けました。そこにいるのは決して嘘を言わない人物です。そのことばは紛れもない本心で、本当に、どこにもとりつく島がありません。

ジュリアは泣きました。泣きながら、懸命に言い続けます。

「では、金の石の勇者は？ あなたは金の石の勇者の後見人でいらっしゃる。その権利をお譲りください、と申し上げたらば？」

とたんに、ゴリスの表情が変わりました。ジュリアを哀れむような表情が、一転して、信じられないほど険しくなります。目を白く光らせながら、ゴリスは答えました。

「それはできない。あいつは俺の所有物ではないし、俺はあいつの後見人というわけでもない。あいつは金の石に選ばれた勇者だ。誰の命令も受けずに、ただ石と自分の意志に従つて世界のために戦うのが役目だ。そもそも俺のものではないものを、あなたに渡せるはずはない」  
声も態度も、はっきりとジュリアを非難しています。ジュリアは恐

るしくなって、思わず後ずさりしました。ただ言ってみただけです、と言おうとするのに、怖くてその声さえ出せませんでした。

そんな彼女に、ゴーリスは宣言するように言いました。

「俺に支払えるものであるなら、俺はいつでもなんでもあなたにそれを支払う。それが俺の償いだ。だが、今日は帰るがいい。もう日が暮れる。暗くなってからの道は物騒だ。また出直してこられよ」

冷たく固い拒絶でした。どんなに追いつがって引き止めようとしても、この人は絶対に自分の元へは戻ってこないのだと思い知らされてしまいます。

はらはらと涙を流しながら、ジュリアは尋ねました。それこそが、一番最初に、当たり前に出できそうな質問でした。

「ゴーラントス様……他に好きな方がおできになったのですか？」

すると、たちまちゴーリスの態度が和らぎました。同情するような、優しい距離感を漂わせて答えます。

「俺は生涯、結婚はしない。あなたとも、あなた以外の女性とも、誰ともだ」

もう帰られよ、とゴーリスがまた言いました。

ジュリアは泣きながら、ゴーリスの屋敷を後にしました。

それから半年ほどの間、ジュリアはゴーリスの元を訪ねませんでした。

慰謝料の件を巡って喧嘩別れのようになったので、ゴーリスとしても気がかりではあったのですが、それ以上に、国政に絡む職務が忙しくなっていました。

今やゴーリスは周囲の誰もが認める、国王の重臣のひとりです。彼が見つけ出してきた金の石の勇者は、今度は隣国エスタを風の犬の危機から救い、エスタ国王はそれに感謝して、ロムドと永久に同盟を結ぶと言ってきました。それがことばだけでは足りない本物の和平条約らしい、とわかって、ロムド国民は誰もが驚嘆しました。隣国エスタとの対立は、数百年にも及ぶ歴史があります。その血みどろの争いに、ついに終止符が打たれたのです。

誰もが金の石の勇者の功労を認め、その勇者の育ての親であるゴーリスの地位もまた相対的に上がりました。国王も国政にゴーリスの意見を求めます。ゴーリスは庶民の暮らしぶりに精通していたので、その見解が高く買われたのです。いつのまにかゴーリスは、国王の片腕とも言える身分にまで上り詰めていました。

けれども、国の誰からも敬われる立場になっても、ゴーリスは相変わらずゴーリスのままでした。金の石の勇者を見つけたもう一人の功労者である、占者ユギルと共に、淡々と、そして休むことなく国王に仕え続けていました。偉ぶることもなく、派手な暮らしぶりを始めるでもなく、相変わらず偏屈で無愛想なままです。そして 相変わらず、浮いた噂ひとつありませんでした。

独身で大貴族で国王の重臣の彼には、今では途切れることもなく縁談が舞い込みますが、本人は仕事が忙しいから、と片端からはねつけていました。どれほど身分高い相手からの話であつても、相手の面子に配慮することもなく、即座に断ってしまいます。宮廷の中では、ゴーラントス卿は仕事と結婚をして一生独身のままで過ごすのだろう、とさえ噂されていました。

そんなある夜、ゴーリスの屋敷に訪問者がありました。いえ、正確には侵入者です。まだ夜更けには早い時間帯でしたが、闇に乗じて黒い服の男たちが屋敷に入りこんできて、突然ゴーリスを取り囲み、力

ずくで縛り上げたのです。

さすがのゴリスも、不意を突かれては抵抗のしようがありませんでした。屋敷の中では武器を外していたので、自慢の剣で戦うこともできず、罪人のように縄をかけられてわめきます。

「何者だ！？ 俺にこんな真似をして何をするつもりだ！？」

宮廷での地位が上がると言うことは、それだけ政敵も増えると言うことです。こんな危険な事態も予測して屋敷の守りを強めておいたのに、あっさりそれを突破されてしまったことにも衝撃を受けていました。

すると、男たちの後から、ひとりの人物が部屋に入ってきました。

「何もいたしませんわ。ただ、お約束のものをいただきにまいっただけです」

ジュリアでした。栗色の豊かな髪を結び上げ、深い緑のドレスに身を包んでいます。半年前の取り乱し方が嘘のように、その晩の彼女は落ちつき払っていました。

ゴリスは顔をしかめました。

「約束のものというのは慰謝料のことか？ ならば、あなたの望むものはなんでも支払うと言っておいたはずだ。こんな大げさな真似などする必要はないだろう」

だから早く縄を解け、とゴリスは言いましたが、ジュリアは首を振りました。穏やかにほほえみながら答えます。

「いいえ、ゴラントス様。私がいただきたいものは、こうしなれば手に入らないのです」

ゴリスの表情が変わりました。疑うような目で、ジュリアの表情を探ります。

「俺の命をよこせというのか？ それだけは無理だと言っておいたはずだぞ」

「いいえ、そんなものは」

ジュリアは笑い声を上げました。首をかしげるようにして、囚われの剣士を見上げます。

「私がいただきたい慰謝料はあなたですわ。あなた様ご自身を私にくださいませ、ゴラントス様。それ以外のものは、何もいりません」

ゴリスは呆気にとられました。目の前の女性をただ見つめてしまいます。

もう娘とは言えない歳になってしまったジュリアですが、その分、落ちつきと賢さを漂わせながら、じつと彼を見つめ返しています。その瞳の奥には、強い決心の色がありました。

ゴリスは思わず目をそらすと、苦笑いを浮かべました。

「馬鹿なことを思いつく……。そんなことができるわけがないだろう。俺を慰謝料にもらい受けるなんてことが、どうしてできると思うのだ」

「でも、あなた様は、自分に支払えるものなら、なんでも私にくださると誓ってくださいましたわ」

ジュリアの声はあくまでも穏やかです。

馬鹿な、とゴリスが笑い飛ばそうとしたとき、別の人物の声は部屋に響いてきました。

「おやおや、いけませんね。ゴラントス卿ともあるうお方が、約束を反故にすると言われるのですか？」

長い銀髪に左右色違いの瞳の青年が部屋に入ってきました。暗い灰色の衣ですっぽりと身を包んでいるので、うっかりすると、夜の暗がりにも溶け込んで見逃してしまいそうなほどです。

青年を見たたん、ゴリスはまた顔をしかめました。

「なるほど、ユギル殿も一枚かんでいたのか。どうりで、我が家の守りがあつさりと破られたはずだ。天下の占者がついていたのではな」

「こうでもしなければ卿はお約束を守らない、と占盤に出ておりましたので」

とユギルがすまして答えます。ゴリスはますます渋い顔になりました。

「これは貴殿には関係のない話だ。ジュリア殿から何を聞かされたかわからないが、我々二人の話に、第三者が口をはさまないでもらいたい」

けれども、いくらならまれても、ユギルは涼しい顔のままです。

「そうはまりません。卿はジュリア様に、確かに慰謝料としてなんでも与える、とお約束されましたし、手紙にもきちんそう残っております。約束はお守りください、ゴラントス卿。あなた様ご自身が、ジュリア様への慰謝料です」

「だから、何故そつなるのだ!？」

ゴリスはたまりかねて声を上げました。

「そんなことができるわけがあるまい! 馬鹿を言うにもほどが」

「あなたを私の故郷に連れて帰ります」

とジュリアが突然答えました。

「あなたは私のものですもの、私の好きにさせていただきますわ」

ゴリスはまた呆気にとられてしまいました。なんと答えて良いのかわからなくなり、しばらく考え込んでから口を開きました。

「ジュリア殿、常識で考えられよ。いくらなんでも支払うと言っても、できるものできないものがあるだろう。それに、俺は今、ディーラを離れるわけにはいかない。陛下がお許しになるはずがないのだからな」

その声は、まるで小さな子どもをあやして言い聞かせるような口調でした。ゴリスを見上げ続けるジュリアの目の中に、悲しい色が流れました。

「本当に困ったお方だ……」

とユギルがあきれたように肩をすくめ、急に部屋の扉の外へ呼びか

けました。

「ゴラントス卿はどうしても『うん』とおっしゃいません。どういたしましょう、陛下?」

「なに!？」

ゴリスが愕然がくぜんとしていると、今度はロムド国王自身が部屋の中に入ってきました。国務の場では必ずかぶっている冠を外し、ユギルと同じような暗い灰色の衣で身を包んで、お忍びの格好です。苦笑いしながら占者に向かって言います。

「これ、ユギル。わしはこの場にはおらぬことになっているのだぞ。呼ぶのではない」

けれども、そう言いながらも、国王の口調はどこか楽しそうでした。

ゴリスは本当に呆気にとられてしまって、しばらくは口もきけませんでした。目の前に立つ人々を眺め、その一番手前で自分に向き合っている女性を、つくづくと見つめてしまいます。

「陛下に直訴までしたのか……まったく、予想外のことばかりする人だ、あなたは」

ジュリアはほほえみました。ことばで答えることはできません。ただ、万感を込めて男を見つめ返します。その瞳からは、今にも涙がこぼれ落ちそうになっていました。

すると、ロムド国王が言いました。

「わしはジュリア殿の訴えに基づいて、この一件を詳細に検討した。確かにジュリア殿の請求には効力がある。そなたは彼女との契約に従う義務があるのだ、ゴラントス卿。今すぐ、ジュリア殿の請求通りに慰謝料を支払うように。それができないのであれば、そなたは相応の罰を受けることになるぞ」

「罰……どのような」

とゴリスが聞き返します。国王は重々しく答えました。

「王都追放だ。十年も待ち続けた婚約者をむげに見捨てるような薄情

な人間を、わしの家臣に数えるわけにはいかぬ。即刻ディーラを立ち去って、地方へ下り、北の辺境で隣国からの攻撃に備えるが良い。行き先は、ジュリア殿の故郷だ。」

「ゴリスは思わず天井をふり仰ぎました。ぐるです。国王もユギルもジュリアも、全員がぐるになって、ゴリスをなんとかひとつの結論に追い込もうとしています。」

すると、国王が笑いました。王は年をとっていましたが、その声は張りがあり、意外なほど若々しく聞こえます。

「もつとも、実際にはゴラントス卿に王都を去られるのは、ロムドにとって大きな損失なのだ。わしとしては、卿にはこのままディーラにいてもらって、卿の屋敷内で、ぜひジュリア殿への感謝料になっていてもらいたいのだがな」

「陛下」

ゴリスは目を閉じました。苦笑いしか出てきません。

すると、銀髪の占者が口を開きました。意外に思えるほど真剣な声で、こう言います。

「ジュリア様とご結婚ください、ゴラントス卿。そして、幸せにおなりください。そうしていただかなければ、わたくしも陛下も、安心することができません」

ゴリスは思わず目を開けてユギルを見ました。青年は、青と金の色違いの瞳に痛ましい色を浮かべながらゴリスを見ていました。この二人の現在の状態は、自分の占いの結果が招いたことなのだと、占者はわかりすぎるほどに承知しているのです。

ロムド国王も静かに言いました。

「そなたもジュリア殿も、本当によく待ってくれた。これほど忠義に尽くしてくれる家臣を持つことを、わしは誇りに思っている。その忠信に報いたいのだ。過ぎてしまった十年は取り戻すことはできない。」

だが、この後の何十年という年月を、その空白を埋めるために使うことはできるだろう。二人共に生きていくことだな」

「陛下……」

「ゴリスは何も言えなくなつて、ただつぶやくように繰り返しました。目の前に立つ女性を、また見つめてしまっています。」

ジュリアはこらえきれずに泣き出していました。それでも、ゴリスに向かつてほほえんで見せます。

「半年の間、一生懸命考えました。私一人ではあなたに感謝料の件を納得していただけないと思つたので、処罰を覚悟で、陛下やユギル様にもお力添えをお願いしました。私は、あなたと一緒に生きていきたいのです。あなたのこれからの人生を、私にくださいませ。全てよこせ、とは申しません。あなたはこの国にも、金の石の勇者にも大事な方ですから。でも、あなたの人生の一部分は、ずっと私にもいただきたいのです。私を待たせて申し訳なかつたと思つたらば……それが、私への償いですわ……」

ほほえむ頬の上を、大粒の涙が転がり続けます。

ジュリア、とゴリスはつぶやきました。敬称をつけ忘れたことは気づいていません。

やがて、黒ずくめの剣士はほほえみました。罪人のように縄をかけられた自分の姿を見回して言います。

「返事をする前に、これを解いてもらつていいか？ 俺は逃げも隠れもせん。それに……この格好では、あなたを抱きしめることができなからな」

ジュリアは両手で口を押さえました。見張った目から、さらに涙がこぼれ出します。それは嬉し泣きの涙でした。

縄を解かれ、部屋の真ん中で抱き合う二人を、占い師と国王は笑顔で見つめていました。

「とまあ、これが私たちが結婚するまでのいきさつよ」

と栗色の髪<sup>かみ</sup>の貴婦人は長い思い出話をしめくりました。ほわぁんとした顔で聞き惚<sup>ほ</sup>れていたらメールとポポ口<sup>くち</sup>に笑って見せます。

「実際に私たちが結婚したのは、それからさらに半年後の、先月のことよ。貴族の結婚は支度に時間がかかるから、これでも早い方だったの。結婚してからも、あの人は相変わらずとても忙しかったのだけれど、あなたたちがこのハルマスを訪ねてくるとユギル様が占つてくださったおかげで、私たちも、思いがけず新婚旅行に來ることができたというわけなの。こんなにゆつくり過<sup>か</sup>せるなんて本当に夢のようよ。あなたたちに感謝しなくてはね」

それを聞いてメールは何かを言いかけ、思い直したように口を閉じました。

本当は、「でも、あたいたちがいなかったら、とつくの昔にジュリアさんたちは結婚できてたんじゃないのさ」と言おうとしたのです。けれども、それは言ってもしかたのないことでした。ジュリアたちは、過ぎた時間ではなく、これからの時間を見つめているのです。それならば、メールたちにも何も言うべきことはないのです。

「さあ、ちょうどケーキも焼けたようね」

とジュリアがかまどの扉を開けながら言いました。スグリのケーキの甘酸っぱい匂<sup>におい</sup>いが台所中に漂います。

すると、そこへ入口からゴーリスが顔をのぞかせました。後ろには銀髪の占い師を従えています。

「おお、いい匂いがあるな」

と夫に声をかけられて、ジュリアは穏やかにほほえみ返しました。

「メールとポポ口<sup>くち</sup>が作ったのよ。フルートやゼンたちに食べさせたいつて。よくできているわ」

「そりゃ、さぞかしあいつらが喜ぶだろう」

とゴーリスも笑います。

そんなゴーリスとジュリアを、なんとなくどぎまぎしながら少女たちは見つめていました。表面からは見えなくても、ふたりの間にはしっかりと通い合う気持ちがあるのだと考えます。

のぼせたような顔をしている少女たちに、ゴーリスの後ろに立つユギルが、おや、という表情をしましたが、口に出しては何も言いませんでした。

そこへ、今度は大柄な黒い鎧<sup>よろい</sup>の戦士が顔を出しました。エスタの辺境部隊のオードです。足下には、いつものように白いライオンの吹雪がお伴についています。

「ここにいたのか、ゴーラントス卿。俺<sup>おれ</sup>たちはそろそろエスタに戻らねばならん。挨拶しようと思つて探していたんだ」

ゴーリスたちが、廊下で話を始めました。

ジュリアは少女たちを見ました。

「さあ、こつちはフルートやゼンたちを探さなくちゃね。ケーキでお茶にしましょう」

「あたいが呼んでくるよ！」

メールが即座に答えて台所から飛び出していきました。廊下は通らずに、裏口から直接中庭に出て行きます。

緑のあふれる中庭の小道を、風が吹き渡つていきます。心地よい初夏の風です。

木の葉のさやぐ音を聞きながら、メールは今聞いた物語を思い返していました。城で夫の渦王を待ち続けていた母の姿と、十年間ゴーリ

スを待ち続けたジュリアの姿が、どこかで重なります。明るい茶色の瞳をした少年の顔が、頭の中に浮かんで消えていきます。

いつしか、メールは心の中でつぶやいていました。

待っていたら 待ち続けていたら、いつかその人が自分を振り向いてくれる日も来るんだろっか……？ と。

中庭の上に広がる空は抜けるように青く、木立の隙間すきまから見える湖の向こうには、デセラー山デセラー山の頂たかねがくつきりと浮かび上がっていました。

(2006年12月20日)